



# ”予感”前編



yasuhiro

## 授業

---

夏季が過ぎ、気温は下がり、過ごしやすくなってきた。

空は雲が多いが、太陽の光が眩しい。

こんなに暖かいと瞼が重くってくる。

いっそ瞼を閉じて、心地いい夢の世界に向かいたい。

そこで、男性の声が聞こえてきた。

「おい、西山。この問題を解いてみろ。」

ああ、そうだ。声を聞いて思い出した。

今、授業中だってこと。

閉じそうになった瞼を擦りながら、黒板の方へと顔を向ける。

そうしたら、ちょっと不機嫌そうな男性の顔が視界に捉える。

やばいな～。中島先生怒ってそうだな～。

黒板に書いてある、問題を読んでみる。

う～ん、この問題どうやって解くだったかな。

と考えていると、中島先生がイライラした口調で話してくる。

「わかるか、わからないだろう。今日がいい気温で、お昼寝日和だからといって、うとうとしている場合ではないだろう。来年には受験が控えているのだから...」

先生が語りはじめたので、耳を逸らした。

そういうのはいいから。どこに行くのかも決まってないし、まだ、1年あるからいいじゃんと思っていると、クシャクシャに丸められた紙がこちらに飛んできて、机の上を転がった。

紙が飛んできた方向に顔を向けると、一人の少年がこちらを見ていた。手を動かしてなにかを伝えたいようだ。手の動きを見ていると、彼は飛んできた紙を指差して、開けてとジェスチャーしているようだ。

ためしに、クシャクシャの紙を開いてみる。そうすると、計算過程と計算結果が書いてあった。

また、イライラした口調が耳に入ってきた。

「...だから、今勉強することが大事なんだ。」

先生の語りが終わったようだ。

先生の方を向き、少し大きめの声で、

「わかりますよ。答えはXが2で、Yが6です。」

それを聞いた先生が顔色を変え、口調がゆるやかになり、

「正解だ。なんだ、わかったのか。早くいってくれよ。」

と言い、

「では、教科書の89ページを開いて。」

先生は次の数式の解説を始めた。

彼の方を見たが、先生の話しを真剣に聞いていたため、あとで、お礼を言おうと思った。

## 放課後

---

そして、授業が終わり、放課後。

部活を行うために、グラウンドのテニスコートへ向かって歩いていると

「おーい、西山。」と大きな声が聞こえてきた。

振り返ると、彼、石島くんがこちらに向かって、小走りで走ってきた。

「どうした？」

不思議そうに聞いた。

彼の顔が笑顔になり、

「今日、誰とパートナー組むか決まってる？ 決まってないなら、いつものように組まない？」

その問いかけに、「いいよ。」と答える。

今日も、石島くんと一緒に練習した。なんだか、石島くんと練習をしているととっても楽しい。

お互いに強くなるために努力しているって感じがする。

なんでここまで、石島くんと仲良くなったんだっけ。

あまり覚えてないや、でも、彼はとても前向きに考える人だということは知ったような気がする。

最近では、スリにあったお歳よりの人の鞆を取り返して、犯人を捕まえたり、正義感が強い人とも知った。

そういういい人と練習をしているから、楽しいのかな。

部活動が終わり、学校からの帰り道。

いつもと変わらない、太陽が沈みかけた夕暮れに彼と帰る帰り道。

授業の時のお礼を言わなくちゃと思い、

「授業の時はありがとう。」と気持ちを込めて言った。

ひと間あいて、思い出したような顔になり、

「あの時のことか。まあ、気にすることないよ。」

無意識に赤い夕焼けが目に入る。

ふと、昨日見た夢を思い出す。

その夢の中でも、彼といつもの帰り道を帰っていた。

「このあとどっかいく？」と聞いたら、彼は、「今日は用事があるんだ。だから、早めに帰らなくちゃいけないから、行けないんだ。ごめん。」と申し訳なさそうな顔をする。

心配させないように笑顔を作って、

「うん。別にいいよ。行けたらで、よかったし。」

すると、すこし彼の口が揺るんで、

「そうか。ごめんな。」

その後、世間話をしながら帰った。

## 選択の時

---

次の日、やっばい、はやくしないと遅刻しちゃうといつもの通学路を、他の通行人にぶつかりそうになりながら走り、学校の門をくぐり抜け、俊敏に靴を脱ぎ、靴箱に入れ、上履きを出して、履く。そして、一段飛ばしながら階段を上がり、息をきらしながら教室のドアを開けたら、先生が教壇の上に立ち、「ホームルームを始めるぞ」と言ったときだった。ぎりぎり間に合ったようだ。

先生が点呼をしていき、わたしの番がきたら、気弱な声で「はい」と返事をした。しかし、彼の番になったが、彼の声が聞こえてこない。

「めずらしいな。石島が休みなんで。」と先生が驚いたように話していた。

ホームルームまでに姿を現さなかった彼は、その日学校に姿を現すことはなかった。

帰りはいつも彼と帰っていたので、さびしいなと思いながら一人で家に帰った。

家でおもしろい番組やってないかなとテレビの電源をオンにしたところ。ニュース番組が放送していて、リポーターが緊張した面持ちで、はっきりと大きな声で、夫婦にインタビューしていた

。

「息子さんが事故に遭われてしまいました。加害者に言いたいことはありますか。」

母と思われる女性が泣きそうな面持ちで、「なんで、正敏が死ななければならなかったの。」と少し怒ったような声で話している。

その正敏という言葉聞いて、ある予感が頭を遮る。

もしかして、石島くんこと？

たしか、名前と呼んだことないからあまり記憶がないけれど、自己紹介や石島君が男の友達からそう呼ばれていたような気がする。

再び、テレビの画面に意識を戻すと、その息子の母と思われる女性が荒荒しく、ポケットから息子の写真を取り出す。

「この子が私の息子よ。」とその写真をカメラの方へ向ける。

石島君だ。

そこには中学生の学ランを着た、石島くんが両親と中学校の門の前で笑っている姿が写っていた

。あの夢のことはあまり考えたくない。でも、本当に事故に遭ってしまったらどうしよう。

今、私に出来ることはないかな。

あの出来事は夢だし、そんなに気にすることないかな。

後半Aパートへ

実際にあの夢のようになるかもしれない。

後半Bパートへ

